

Asian Breeze

エイジアン・ブリーズ54号・平成20(2008)年10月発行 年3回発行



いま、女性たちは	1	英語でCooking!	7
誌上セミナー	2	KFAWカレッジ	8
財団設立15周年によせて	3	海外通信員レポート	9
海外通信員現地報告	4	フォーラムの窓	10
JICA行政官セミナー	5	インフォメーション	11

NO. **54**
OCTOBER 2008

いま、女性たちは

世界における今日の女性の状況



ギタリスト、音楽家
クロード・チアリ



ヨーロッパやアジア、米国における女性の地位は、50年前、あるいはそれ以前と比較すると大きく変化したように思います。もっとも「アジア」と言っても、私が知っているのは中国と日本、韓国のことですが、これらのアジア諸国を含めて多くの国で、多くの女性が社会の指導者や企業の経営者となり、ビジネスで成功する女性も増えています。しかしながら、このような女性はまだ少数派であり、特に開発途上国においては、まだまだ問題が山積しています。

私が子どもの頃、多くの男性は、育児や家事は女性の仕事だと信じていました。また、20世紀の初めまで、女性には参政権がありませんでした。そう考えると、女性をとりまく環境は劇的に変化したように思えます。しかしいまだに、職場で男性と同じように働いている女性の賃金は男性より低く、昇進の機会も少ない場合が多いです。さらに、ある年齢に達すると退職を勧められる職業さえあります。また、結婚や出産、育児に関しても、職場から以前より多くの支援を得られるようになりましたが、まだまだ十分とは言えないでしょう。

私はフランスで生まれ、29歳でタヒチに引っ越しました。1975年にコンサートツアーで日本を訪れた時に、妻となる女性に出会い結婚しました。その後、婚姻の届出をするために市役所に行った際に、妻の名字が旧姓のまま変わらないことを初めて知りました。その理由を尋ねると、私が日本国籍を有していないので、妻の名字を変えることができないという説明を受けました。フランスではそのようなことはありません。私は怒りを覚え、すぐに日本国籍を取得す

る決心をしたのですが、実際に手続きを終えるにはかなりの時間がかかりました。また、現行の日本の国籍法では、日本人女性と外国人男性の間に生まれた子どもは、たとえ両親が結婚していなくても日本国籍を取得する権利を持ちます。しかし、1984年の改正以前は、日本人女性と外国人男性の間に生まれた子どもは、両親が結婚していても日本国籍が付与されませんでした。このような制度を変えるには何年もかかり、そのために相当声を上げなければなりませんでした。

私は、アジアに限らず世界中の女性が、平和とその維持のために重要な役割を果たしていると思います。女性は生命をはぐくみ、子孫を守ろうとすることで、地球の平和と命を守る働きをしてきました。対する男性は何世紀もの間、戦争にあけくれ、環境を破壊し、世界中で苦しんでいる人びとのことを無視し続けてきました。多くの場合、われわれ男性は妻や周囲の女性の声に耳を傾けてきませんでした。やっとなんて女性の意見が正しかったとわかり、同意するようになりました。事実、何千年もの間、女性は政治の舞台裏では重要な役割を演じてきました。

私は64歳になりますが、この年になるまで、というよりいまだに、女性の強さと忍耐力には驚きを感じます。男性は女性よりはるかに賢いと思っている男性は多いですが、それは間違いだと私は思います。

私は書くことは苦手で、自分自身、アジア、あるいはその他の地域の女性の地位について語るのにふさわしい人間だとは思っていません。しかし、私は音楽家として、私の曲を聞いてくれた人が幸せな気持ちになれるようにと常に願っています。そして、かつては私のファンの大多数が、また今日でもコンサートの聴衆の60%が女性です。

今世紀が終わるまでには、世界中で女性がより大きな役割を果たすようになってきていることと思います。私は男女が共に幸せであることを願っており、必要とあらばいつでも女性の支援者となるつもりです。

クロード・チアリ Claude Ciari

フランス・ニース出身。1964年ソロのアコースティック・ギタリストとしてデビュー。代表曲は「夜霧のしのび逢い」、「夜霧のシルエット」など。日本女性と結婚後、日本に帰化。1995年の阪神・淡路大震災では、自ら被害を受けながらも、全国各地でチャリティーコンサートを開くなど、復興活動に協力した。

スポーツとジェンダー

最終回

～学校体育と性役割～



京都教育大学体育学科
教授 井谷 恵子

教員採用に関する不祥事がメディアを賑わせています。受験者の得点を操作して不当な採用がなされたというもので、学校教育への批判が強まっています。筆者は十数年前から中高等学校の保健体育教員人事における不当性を取り上げてきました。女性教員が各校1～2名に限られ、その役割もダンス指導などに偏っているために、保健体育教員の採用では男性受験者が相当有利になっている実態を指摘したものです。高等学校では男女共学の普通科でさえ、保健体育教員は全員男性という学校もありました。

数年前にある地方教育委員会に対して、高校保健体育教員の採用試験の採点基準や項目別試験結果について情報公開を求めましたが、開示されませんでした。平成13年度採用では、競争倍率が男性15.9倍に対して女性106倍、平成15年度採用では、男性35.3倍に対して女性97倍でした。この教育委員会には男女共同参画申出処理制度を利用して、教員採用試験における男女差別の改善を求めましたが、その審理の結果は教育委員会の人事に対して予想以上に穏やかなものでした。その後、ウェブサイト採用試験結果を掲載する教育委員会も増えていますが、男女別競争倍率については読み取れないサイトが多くみられます。

スポーツは男女共有の運動文化であり、トップレベルの競技者からレジャーとしてのスポーツ活動まで参加の男女差は狭まりつつあります。体育系の大学や専攻に在籍する女子学生の比率も40%程度と推測できます。しかし、保健体育教員をはじめとしてスポーツ指導者や審判、役員などの重要なポジションは男性が寡占しています。北京オリンピックでの日本選手団（参照（財）日本オリンピック委員会 <http://www.joc.or.jp>）は、本部スタッフ（団長、本部役員、本部員など）30名のうち女性は4名にすぎません。競技別にみると、例えば陸上競技では選手40名（女性16名、男性24名）に対して、役員20名（監督、コーチ、トレーナーなど）では女性1名のみです。柔道は役員全員が男性です。女性が陸上競技や柔道に進出してから久しく、指導者に適した人材は大勢輩出されていると推測できます。スポーツ界では、女性指導者を育てる意識も環境も貧

弱な現状があります。

スポーツや教科としての体育は身体抜きでは成り立たない領域です。「筋肉重視・脂肪排除」という文化特性は、平均値とはいえ男女の差異を顕在化します。こういった土壌の上に構築された体育・スポーツは、男女の体格・体力の差異や運動・スポーツへの志向、メディアが描く男らしさ・女らしさなどが混然一体となって、男性優位や性役割を自然で所与のこととして浸透させていくのです。保健体育教員は身体発達や生涯にわたる運動実践について指導する専門家であって、トップアスリートとしての経験や体格や体力が問われる必要はありません。近年では、あらゆる職業に関して性別分業の境界が薄れてきています。かつて一方の性による専売特許と思込まれてきた職業がその性別分業を変容させている実情を見ると、これまでの職業に関する認識がいかに偏ってきたかを実感します。

学校体育の性別分業について、シンボリックに取り上げられるものに運動部における「女子マネージャー」の存在があります。マネージャー本来の役割は重要なものですが、特に高校での運動部活動ではその役割と役割期待が変質しているところに問題があります。洗濯や掃除、お茶くみなどジェンダー・ステレオタイプの業務が大半であり、そういった「下積みで地味な仕事」を黙々とこなすことを礼賛する土壌があるのです。これらは家庭における再生産的労働と同じ性質を持ち、表舞台での活躍やそれに対する可視的な報酬とは対立的な役割です。さらにマネージャーという存在は、部活動での性別役割分業だけでなく、表舞台で苦しさに耐えてがんばる男性たちを陰で支え、愛情や癒やしの存在としての女性という心理的なジェンダー形成のシンボルとして読み取ることもできるでしょう。

近年の体育・スポーツ分野を対象としたジェンダー研究は、これまで述べてきたような男女の差異が自然でも所与のものでもなく、男性中心社会において構築されてきたものであり、身体やスポーツという一見自然に見える媒体ゆえに、社会のジェンダー形成に巧妙に加担させられていることを読み解きつつあります。

15th Anniversary 財団設立15周年によせて

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) 会長 三隅 佳子

KFAWは、アジア地域の女性の地位向上と連帯・発展を目指して「まなびあう」「ふれあう」「たすけあう」をモットーに設立され、財団法人となって今年で15周年を迎えます。

● ふるさと創生事業として

1988年12月に国は「自ら考え自ら行う地域づくり事業（ふるさと創生事業）」として、全国の自治体に1億円ずつ交付することを決定しました。北九州市では、これにふさわしい事業を職員から募集し、101の案が寄せられました。その選定に当たった地域づくり懇話会は、全国に例がないこと、これまでの「モノづくり」に加えて「心あるまちづくり」に寄与できることなどを理由に、婦人対策室（当時）提案の「アジア諸国との交流を深め、調査・研究・研修を行う常設機関の設置」を採用しました。

1990年10月に、KFAWは任意団体として発足しました。その後、財政基盤の確立を目的に女性団体が中心となって募金委員会が結成され、その熱意ある活動に呼応して市も出資を行い、1993年10月に労働省（現厚生労働省）認可の財団法人となったのです。

● 活動の柱は「交流」と「研究」

KFAWは、その名の通り交流と研究が2本の柱であり、情報の収集・提供がそれを支えています。研究では地域・家族・環境・開発・労働など多様なテーマで、アジア諸国の大学などと連携して女性に関する最新の情報を提供してきました。交流では、年1回時宜に合ったテーマで国際シンポジウム「アジア女性会議—北九州」を開催。また、研修の代表格は、独立行政法人国際協力機構（JICA）から委託を受けた「ジェンダー主流化のための行政官セミナー」、「環境と開発と女性セミナー」の実施です。海外からの研修生は既に280名を超え、市民とふれあう貴重な場ともなっています。開発途上国の女性を支援する「ユニフェム北九州」の事務局としての活動も、国際協力・貢献として重要です。その他北九州博覧祭の出展協力、北九州市女性の100年史『おんなの軌跡・北九州』（ドメス出版 2005）の編さんなど思い出は尽きません。

● 環境・開発・ジェンダーの視点

環境・開発は設立以来取り組んできたテーマの1つです。これは、国際婦人年以降の世界のスローガン「平等・開発・平和」の達成を目指す国際的動向を踏まえ

たものであり、地元婦人会の「青空がほしい」運動を担った女性たちの思いを受け継ぐものです。1992年には地球サミットの開催に際して「環境と女性」をテーマに国際シンポジウムを行い、北九州の女性の活動に光を当てました。

その後、1995年の北京女性会議、1996年の日米環境女性会議、2000年のアジア太平洋環境女性会議、同年のニューヨークでのグローバル・フェミニスト・シンポジウム、2002年のヨハネスブルグ・サミットNGOフォーラムなどそのすべてに市民と共に参加し、環境・開発・ジェンダーをテーマにワークショップを開催してきました。中でもヨハネスブルグ・サミットには、日本政府代表団顧問に女性グループを代表して参加し、KFAWは環境とジェンダーに関する世界的NGO活動の一翼を担うようになりました。



▲ヨハネスブルグ・サミットにて

● 公平で持続可能な社会の実現を目指して

2006年9月、KFAWが事務局を担当し、北九州ESD協議会が設立されました。ESD（Education for Sustainable Development）とは、環境、経済、社会のバランスのとれた開発を目指す教育を言い、自然環境との共生、経済的な発展、社会的な公平性を視野に入れた新しい社会づくりの概念です。そこで大切なのは人であり、教育です。ESDには多様な分野の教育が含まれ、そのすべてにジェンダーの視点が必要なため、ここにKFAWのかかわる必要性があります。

KFAWは、今後も世界の流れと連動しながら活動を行い、調査・研究活動の充実、国内外とのネットワークの構築など、女性の地位向上、男女共同参画の推進に努めていきます。同時に、設立時に期待された「心あるまちづくり」に寄与できるような活動を続けたいと思います。

中国の百年の夢 — 北京オリンピックを肌で感じて

大浜 慶子 (中国)

2008年8月、中国が「百年の夢」と銘打つ北京オリンピックが開催され、世界のアスリートたちの熱戦が繰り広げられました。幸運にもこの期間、北京の住民の1人として私もビッグイベントのもたらす高揚感に浸ることができました。街中、一斉に色鮮やかなポスターや横断幕が掲げられ、気分はいや応なく高まります。仕事場では誰しもそわそわし、帰宅するとテレビにかじりついて深夜まで試合の動向を入念にチェック、翌朝は同僚たちとあれやこれやの熱い議論です。



▲「より速く、より高く、より強く」のオリンピック精神を表すモニュメント

しかし、何といてもオリンピックの熱気をじかに味わえる場所はメインスタジアム。私も、日本でもおなじみとなった鳥の巣競技場で陸上の決勝を堪能しました。前から2列目という、選手の息づかいや緊迫感まで伝わってくる席に座ったため、ついつい注視してしまうのは女性アスリートたちの一挙手一投足。男性とは異なる美しくしなやかな身体で、記録や限界に挑戦している姿は感動的でした。近年、オリンピック種目を男女平等にしようという動きが高まり、北京オリンピックでは女性の参加選手数がさらに増加して活躍の舞台が広げられ話題を呼びました。あまり知られていませんが、開催国中国の歴代オリンピック成績は一貫して女性優位です。今回中国は51個の金メダルを獲得して首位に立ちましたが、その男女比は24:27。「前回より男女差が縮小してよかった、これからもっと男女の調和がとれるように努力しなければならない」というスポーツ論説さえ飛び出して、女性が強いお国柄がこんなところにもうかがわれます。

さて、オリンピックの16日間は夢のように過ぎていきましたが、このスポーツの祭典が北京の人びとに残した遺産は計り知れないものがあり、北京市の様相を大きく変容させました。この変化は、中国がオリンピック招致を行った際に提起した3つの理念「緑のオリンピック、科学技術のオリンピック、人文のオリンピック」に基づき、招致が決まってから7年間努力した結果といえます。

「緑のオリンピック」とは環境保護のこと。北京は乾燥し、埃っぽい首都で有名ですが、急速な経済発展がそれに輪をかけ、大気汚染が年々深刻化していました。しかし、オリンピックが近づくにつれ緑化率がアップし、しっとりとした潤いのある街に生まれ変わりました。また、期間中、車の台数が制限されたことでようやく北京に青い空が戻ってきました。住民は利便さにとらわれず、環境に配慮すればもっと住みやすい、快適な都市になると知り、閉幕後も車の台数をこのまま制限し続けるかどうか議論されているところです。

「科学技術のオリンピック」の実現により、立体的な交通ネットワークが整備されました。地下鉄や電車の新路線が開通し、郊外にマンションを購入する人びとも増えて活動空間が飛躍的に拡大しています。一方、満員電車に揺られて出勤する慌ただしいライフスタイルは、日本と大差なくなりました。人情味溢れる四合院（中国の伝統的な家屋）の生活や、社会主義体制下で生まれた職住接近の、のんびりした光景が失われていくのは少し寂しい気もします。

「人文オリンピック」の名の下に各種ボランティア計170万人が動員され、オリンピックの成功を支えました。私は、中国人の夫の母とスタジアムの見学に行った時、彼女のボランティアの制服姿に驚きました。自ら志願してコミュニティのボランティアに登録したとのこと。今は退職していますが、居住区の安全と秩序を守る仕事を任されて誇らしげでした。ボランティア志願者の多くは女性で、オリンピック終了後も交通整理など一部はそのまま継続されます。

オリンピック旋風が去った後に北京に残された宝物、それは国際的な大イベントに感化されつつ、その陰の立役者を立派に務めた、現地の多くの女性たちの自信と輝きであるかもしれません。

第7回 JICA 「ジェンダー主流化政策のため

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) は、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 九州国際センターから「ジェンダー主流化政策のための行政官セミナー」実施の委託を受けています。このセミナーの目的は、開発途上国のさまざまな分野においてジェンダーの視点を主流化するための施策を、効果的かつ総合的に推進できる行政官の育成です。

今年度も2008年6月20日から7月18日まで約1カ月間にわたり、15カ国から15名の研修員を受け入れ、男女共同参画社会の実現に向けた研修を実施しました。例年このセミナーの参加者は、7～8名程度ですが、今年は各国から多くの参加希望がJICAに寄せられたこともあり、例年の倍の人数でのセミナー開催となりました。このことは、開発途上国においてもさまざまな

1

マディナ・カシミ (アフガニスタン)

女性省ジェンダー部部長

アフガニスタンは、いまだ多くの困難を抱えた国ですが、中でも大きな問題は、政情不安や貧困、因習、女性やマイノリティに対する差別です。今回の研修で学んだすべての事柄が興味深く有意義なものでしたが、特にジェンダーの主流化としての意味を持つジェンダーに配慮した予算や年代に応じた教育におけるジェンダーの主流化、女性と環境のかかわりなどが印象に残りました。今回の研修で得た多くの有益な情報を、まずは組織内で共有することから始めたいと思います。

6

ミシェル・ドゥヨン (ハイチ)

女性省調査計画部コーディネーター

今回の研修で、ジェンダー主流化のための戦略および施策を推進するに当たり、行政あるいは民間を問わない強力なネットワークと女性の基本的ニーズを踏まえた組織の構築が有用な手段となることを実感しました。共通の目的を正しく理解した強力なネットワークの存在は、意思決定レベルの人びとにより大きな影響力を及ぼすことができるでしょう。

2

ネナド・ガルチ (ボスニア・ヘルツェゴビナ)

スルブスカ共和国ジェンダーセンター法務アドバイザー

ジェンダー主流化の阻害要因を一言で語ることはできませんが、ジェンダー主流化を推進するための十分な人的・財政的資源を確保することが容易でないことを挙げることはできるでしょう。ジェンダー主流化の具体的事例を実体験できる現場訪問は、非常に有意義な研修プログラムでした。訪れた現場の1つである生活協同組合の組合員に対する子育て支援システムは、わが国の女性従業員の割合が高い職場におけるジェンダー主流化推進のヒントになると感じました。

3

テ・チョン・ハック (カンボジア)

女性省地方行政事務所ジェンダー主流化コーディネーター兼主任

カンボジアでジェンダーの主流化を進めていくにあたり、何よりも問題となるのは関連省庁との協力体制の不備と、予算や人材が限られていることです。日本での研修を通じて、わが国の組織や各部門は、現状では十分に力を発揮できていないと感じ、適切な組織と職場環境の重要性というものに気づかされました。われわれは同じ問題に同じ志で取り組んではいますが、より一層適切な人材確保のための能力開発に努めたいと思います。

4

マリア・ピラルル・ヒメネス・アルヴァレス (チリ)

輸出促進局ヨーロッパ課商務アシスタント

私は、直接ジェンダー主流化を推進する部署に籍を置かない行政官です。そのため、今回の研修の成果を自国で活用するにあたっては、同僚の理解や協力を得ることに困難が予想されます。しかし、男女共同参画センターで行われているさまざまな取り組みや、ワーク・ライフ・バランスの考え方など、わが国の問題解決に有効と思われることから、始めていきたいと思っています。

5

ルセ・マイヴガレイ・ファトゥパイト (フィジー)

保健女性社会福祉省女性局女性支援上級担当官

実際に訪問した生活協同組合の、営利を追求するのではなく、地域福祉の実現を目指す姿勢はわが国でも参考になると感じました。安全な商品を目指すことで、自分たちの環境や農業を守るという考え方は、わが国の農村部で小規模な事業を行っている女性たちのエンパワーメントにつながる考え方だと思います。生活協同組合の在り方は、平易でありながら女性のエンパワーメントを推進する上で、持続可能なシステムであると言えるでしょう。

8

チャンソダ・ボンティプ (ラオス)

総理府国家女性向上委員会事務局副局長

この研修で学んだあらゆる事柄が、ラオスにおけるジェンダー主流化の推進に応用できる有用なものでした。特に、ラオスのナショナル・マシナリーである国家女性向上委員会の実施すべきジェンダー施策を検討するにあたり、とても参考になりました。まず、職員の能力を向上させるために、継続的な訓練実施の行動計画を策定することや、視察学習を実施すること、さらには、そのための手法やセクター別にこれらの手法を生かしていく方法の習得が重要だと考えています。



7

サリタ・

ラジャスタン州女性児童局

私が働くインド・ラジャスタン州において、問題は、女兒と女性に対するコミュニティ内問題解決のための取り組みを行っていますが、今回の研修で訪れた、就学前段階の教育をた教育の在り方には、非常に感銘を受けました。思春期の少女の能力開発のための特別なプ

の行政官セミナー」を実施しました

施策を進めていく上で、ジェンダーの視点は欠くことのできないものであるという認識が浸透してきた結果ではないかと感じています。

セミナーは、主にJICA九州国際センターで実施され、経済・教育・健康・環境・行政・人権などさまざまな分野の第一人者の講師による講義だけでなく、ワークショップや、研修員同士のディスカッション、現地視

察など盛りだくさんの内容となりました。今後、今回の研修で学んだことを生かし、各国の政府や地方自治体でジェンダーの主流化を強力に推進していくであろう研修員の皆さんに、自国の課題やその解決策、日本での研修の中で有意義だと感じたことなどをお尋ねしました。

9

アニー・オメガ・ナマゴンヤ (マラウイ)

女性児童開発省女性局ジェンダー・開発担当官

日本で中央政府以外の地方自治体にも男女共同参画を推進するための部署を設置していることは、わが国にはない良い政策だと感じました。実際に多くの現場を訪問したことで、例えば勤労婦人センターが性別に基づく固定的役割分担の克服や求職者のスキルアップに貢献していることが分かりました。一方、先進国である日本が男女共同参画の面では、まだまだ状況改善のために奮闘していることも知り、分野によっては日本が途上国から学ぶこともあるのではないかと感じました。

11

シャラダ・バシヤル・ベルバーシ (ネパール)

女性児童社会福祉省女性開発局女性開発担当官、監視・評価担当官

私の職場は、国家発展にかかわるあらゆる取り組みの中で、ジェンダーの主流化を実現していくことを担当しています。また、ネパール全域で女性や子どもの社会福祉の実現に努める唯一の機関でもあります。日本の男女共同参画センターのような施設を設立し、その機能を強化していくことは、女性の地位に影響を及ぼすあらゆるジェンダーの問題にとって重要ですし、日本で学んだ就学前教育の在り方も特筆すべきことでした。私の国においても、こういった取り組みを始めていきたいと思います。

12

ファティマ・ラミシ・アドム (ナイジェリア)

国家女性開発センター企画調査統計局局長

研修の一環として病院や生活協同組合、男女共同参画センター、小学校や保育園を実際に訪問したことは、講義で習ったことを身をもって体験する良い機会となりました。私の職場は、ジェンダー平等の推進に尽力してはいますが、ほとんどのプログラムが女性のみを対象としており、男性向けあるいは男女向けといったプログラムは皆無です。地方政府を動かす草の根的活動の重要性を認識し、モデル地域において女性たちが自分の主張を表明できる場の創設に取り組んでみたいと思います。

13

アンドリュー・イキ (バブアニューギニア)

コミュニティ開発省コミュニティ開発局コミュニティ学習開発センタープログラムオフィサー

まずわが国で行いたいと考えていることは、既存の政策や法律の再検討です。今回の研修で学んだあらゆる知識を、すべてのジェンダー・プログラムへ統合していくつもりです。また、私の属するコミュニティ開発省の仕事を通じて、わが国政府関連省庁へ、ジェンダー主流化の推進を促し、それらの組織の行動計画の中にジェンダー主流化の視点を盛り込むことを求めていくつもりですし、わが国のNGOや寄付団体にも同様のことを求めていくことになると思います。

14

オクタヴィオ・ダ・コスタ・モンテイロ・デ・アルメイダ (東ティモール)

農漁業省政策企画局局長

私たちの組織を強化し効率化していく上で、日本が採用している手法や提供しているサービスは参考になると感じました。今私は、いかに職場を効率的で生産性の上がるものとするかに最大限の努力を払わなければならないと感じています。今後、私の省が掌理している予算の2%を農村部における女性農家への技術支援に充て、農業世帯の収入創出や人びとの食糧アクセスの向上を目指していきたいと考えています。

10

エリカ・リズベス・コルネリオ・ラモス (メキシコ)

キンタナロー女性研究所男女共同参画部研究・評価担当官

わが国は、既に労働者を支援する法制度を有してはいますが、ワーク・ライフ・バランスのような考え方は一般化していません。今回の研修で学んだワーク・ライフ・バランスの考え方は、女性が仕事をしていくための、よりよい労働条件の実現に有用であり、女性により多くの自由や効率性をもたらす優れたツールだと思っています。また、今回の研修で取り上げられた、世界中の女性にとって重要であると言える「女性と開発」のプログラムも極めて有用なものでした。

15

マリア・ノエル・アヴァス・アポリト (ウルグアイ)

国家女性機構UNIFEM支援プロジェクトアシスタント

男女共同参画センターを中心に推進されている、北九州市におけるジェンダー主流化のための活動は、非常に興味深いものでした。この事例は、政府とNGOが、いかに共同していけば女性の置かれた環境を改善することができるか、男女の平等を達成することができるかを示す良い事例だと思っています。私は、訓練こそが知識を伝達する上で有用なものであると考えます。私は、地方レベルでのジェンダー主流化に向けたトレーニングコースを設立したいと思っています。



シン (インド)

女性エンパワーメント局局长

ジェンダー主流化を阻害する最も大きな問での誤った考え方です。もちろん、政府も社会変革のスピードは非常に遅いと言えます。担う保育園における子どもの権利を尊重した。自国でも就学前教育機関の強化や、プログラムの実施に努めたいと思います。

英語でCooking!

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) では、アジア・太平洋地域を中心とする女性の地位向上を目指して、各国との交流を図り、相互理解を深める事業を実施しています。その事業の一環として、今回は北九州市国際交流員の米国人男性バレット・バルヴァンズさんを講師に迎えて、主に中学生・高校生を対象に、英語を交えた料理教室を開催しました。

「みじん切り」や「焼き色をつける」などは、料理ではよく使いますが、学校の英語の授業ではなかなか習わないような言葉です。今回は、外国人男性と一緒に実際に料理をしながら、身近な英語を学ぶと同時に、家事の中でも料理は女性がするものという、まだまだ根強い固定観念を一掃してもらうことを目的に、このイベントを企画しました。

当日は女子15名、男子5名の合計20名の参加者が集まりました。まず講師のバルヴァンズさんが、簡単に料理の説明を行いました。この日のメニューは、メキシコ料理2品とデザート。日本ではあまりなじみのないメキシコ料理ですが、米国カリフォルニア州出身のバルヴァンズさんは、地理的に近いメキシコの料理をよく食べていたそうです。写真も交えた説明のおかげで、これから作る料理がイメージできました。

説明の後、班に分かれて、いよいよ料理教室の開始です。まずは、デザートのモンキーブレッドにとりかかります。モンキーブレッドはスパイシーなメキシコ料理の後に食べる甘いデザートパンで、猿が好きなバオバブという木の実に似ていることからこの名前がついたという説もあります。オーブンで焼くと、ムクムクと膨らみ、辺りに甘い香りが広がりました。他にも、小麦粉やとうもろこしの粉で作ったトルティーヤという生地、野菜や鶏肉などを載せて巻いた代表的なメキシコ料理ブリトーや、トルティーヤを油で揚げたチップスに具を載せて焼いたナチョスを作りました。料理の間、バルヴァンズさんが各班を回り、実際に作業をして見せながら「電子レンジでチンする」や「バターを溶かす」などの言葉を英語で説明しました。

料理を始めてから約1時間30分後、すべてのメニューが完成し、みんなで試食しました。同じ班にはお互いに初対面の子もいましたが、一緒に料理をする中ですっかり打ち解けて、楽しい時間を過ごすことができました。試食の後には、みんなでゲームを行い、米国の子どもたちのパーティの雰囲気も体験しました。

最後に、バルヴァンズさんから、米国における男性と女性の違いについてのお話がありました。米国では、仕事をする上で男性も女性も平等であり、性別にかかわらず職業を選ぶことができます。また、日本ではまだまだ女性が主に担うことが多い子育ても、それぞれの職場が理解を示し、男女が協力して平等に行っています。しかし、広い国土を持ち、さまざまな国の出身の人たちが暮らす米国では、それぞれの地域性や宗教、人種などによっては、女性に対して保守的な考え方をする人たちもいるのが実情です。そのような状況であっても、これまでも女性たちは行動することで権利を得てきました。最近では、個人の責任意識が薄くなりつつありますが、自分たちの言動にしっかりと責任を持ち、行動し続けていくことが重要とのことでした。



▲米国における男女の違いについてのお話の様子



▲料理をつくりながら英語での表現を説明するバルヴァンズさん

短い時間の中で料理、試食、ゲームそしてお話と盛りだくさんのイベントでしたが、バルヴァンズさんと簡単な英語で話をしたり、日常生活で役立つ英語を教えてもらったりすることができました。また、参加者から、料理教室ということで講師は女性だと思っていたという話を聞き、若い世代であっても、「料理=女性」という意識があるのだということに改めて感じました。今回の体験が、次世代を担う子どもたちにとって、国際理解を深めるとともに、性別にとらわれない幅広い視野を持つきっかけになればと思います。

KFAWカレッジ ロニー・アレキサンダー氏講演会

「女性の平和って、なに色？～ポーポキちゃんといっしょに考えよう平和、暴力、ジェンダー～」

(財) アジア女性交流・研究フォーラム (KFAW) では、国際協力や国際理解、時事問題など幅広い内容で最新の知識を提供し、国際的視野を持つ人材の育成を目指して、セミナー「KFAWカレッジ」を開催しています。今年度は、ジェンダーの視点と国際性を兼ね備えたワークショップを行うことのできるファシリテーターの養成を目的に、講演会と実践的なファシリテーター養成講座を全8回にわたって開催しています。まずは国際社会の問題を知るために、神戸大学大学院国際協力研究科のロニー・アレキサンダー教授をお招きし、講演会を行いました。



◀アレキサンダー先生の相棒 ポーポキ

©Popoki Peace Project / Ronni Alexander 2005

国際関係論、平和教育が専門のアレキサンダー先生は、2006年に「ポーポキ・ピース・プロジェクト」を立ち上げ、積極的に平和教育活動を展開されています。ポーポキとはハワイ語で「猫」のことで、先生が15年間一緒に暮らしたご自身の飼ひ猫の名前です。ポーポキの日常を通して平和について考える絵本『ポーポキ、平和って、なに色？』（エピック 2007）やDVDも出版されており、先生の相棒として活躍しています。



◀講師のロニー・アレキサンダー先生

当日は、まず近くの席に座った参加者同士が自己紹介をした後、2～3人ずつのグループになって簡単なワークを行いました。先生が下記の言葉を提示され、その中から、平和にはどれが必要かをグループごとに3つずつ選びました。

*多様性	*想像性・創造性	*教育
*自然	*衣食住	*信頼
*自由	*法律	*コミュニケーション
*安全	*いのち	*愛
*富	*社会正義	*行動力
*武器	*芸術	???

選んだ言葉はグループごとにそれぞれ違っており、平和がいかに広い概念を持つ言葉であるかということ

を改めて感じました。

続いて、ポーポキのDVDやクイズを交えながら、平和・ジェンダー・暴力について先生にお話をいただきました。現代社会において、国連機関が人びとの生活向上のために使う額の、約80倍もの額が軍事費として使われています。依然として、戦争とジェンダー・バイオレンスは大きな問題です。ルワンダ紛争では、征服や支配のための武器として、大々的にレイプが行われました。これには、意図的にHIVに感染させたり、自分の民族を増やすために、敵対する民族の女性を妊娠させたりすることを目的としている場合もありました。このような紛争下でのジェンダー・バイオレンスの根底には、女性は男性に比べてさまざまな機会が限られているという、平時からのジェンダー不平等が原因としてあるとのことでした。

また、暴力には、直接的な暴力だけではなく、貧困や差別・環境破壊のような構造的な暴力、さらに文化を口実に直接的・構造的暴力を正当化する文化的な暴力と、3つの形態があります。アレキサンダー先生は、あらゆる暴力をなくすためにはあらゆるレベルでの取り組みが必要であり、国連や国家、NGOや個人などがそれぞれの役割を果たす必要があると力説されました。



▲絵本にサインとポーポキの絵を描くアレキサンダー先生

講演会終了後には、前述の絵本やポーポキをデザインしたハガキ、シールの販売がありました。購入された絵本には、1冊ずつ丁寧にサインとポーポキの絵を描いていただきました。また、参加者の方とも気軽に話をされ、アレキサンダー先生の前には長い行列ができていました。

戦争や暴力など、重くなりがちで内容でありながら、ポーポキというキャラクターの可愛さと先生のユーモアのおかげで、楽しく、心に残る講演会となりました。

その他のレポートはウェブサイトに掲載しています。http://www.kfaw.or.jp/about/18-report.html

消える娘たち—インドの児童の男女比における女児の低下

ミータ・シン(インド)

ある公式統計によると、他国とは逆に、インドでは人口の男女比において、男性が女性を上回っていることがわかります。国勢調査データを分析した結果、性差別に関係する慣習のために、20世紀中に約3,500万人の女児が、この世に生まれることなく抹殺されたことが明らかになりました。女児と言うだけの理由で墮胎が行われ、過去10年の間だけでも、何百万人もの女児が葬られました。児童の男女比は、その国の女児に対する態度を測る、説得力をもった指標です。国勢調査報告では、1991～2001年の10年で、0～6歳の年齢層の男児1,000人に対する女児の数は945人から927人に減少したとされています。男児の誕生を強く希望する社会の慣習が、児童の男女比の不均衡に反映されているのです。

インドという国は、さまざまなカースト・宗教・言語・社会文化的信条の人びとが、いろいろな模様を描くキャンパスのような国家です。しかしながら、いくつかの地域を除き、国全体の1つの共通項として、何世代・何世紀にもわたる男性優位の考えがあります。この考えは、カーストなどの階級を越え、都市部・農村部の区別なく、教育を受けて職業をもった女性の間にはびこっています。男性優位という考えから派生する社会規範としては、嫁が持参する持参金や嫁による老齢の義父母の世話と家事仕事など、無数に存在します。家名の存続や葬式・宗教儀式が重要性をもっている家父長支配の社会文化的枠組みも、男児^{son}選好を助長するものです。家族の中における女性の地位は、産んだ息子の数で決まります。

2001年の国勢調査報告書が発行された後、ノーベル賞経済学者のアマルティア・セン氏が名付けた、インドの「消える娘たち」への責任は誰にあるのかということに関して、さまざまな考察がなされてきました。以前は女児に栄養・保健医療・教育機会・愛情・世話を与えないという育児放棄が行われていましたが、現在では、出産前に女児を簡単に安価に抹殺できる技術がそれにとって代わるようになりました。男児の誕生を約束する出生前性別診断技術と受胎前技術が、インド人口の女児数減少の大きな原因であると考えられます。これに加えて、家族が小規模化した今でも、両親は依然として少なくとも息子を1人は、と切実に望むため、希望数以上の子どもをもうけずに息子を授けたいという思いから、ますます性選別テストが容認・利用されています(Visaria, 2003)。

性選別墮胎に対する行政の無関心と隠れた社会的容認が、この世に生を受けるべき何百万人もの娘たちの権利を侵害しています。この問題にインド社会の目を向けさせようとする政府や市民の運動が、徐々に盛んになってきてはいますが、解決までの道のりはまだまだ長く厳しいものです。

参照 Leela Visaria, "The missing girls"
http://www.india-seminar.com/2003/532/532%20leela%20visaria.htm

ストリートチルドレンに救いの手を

徐 華偉(フィリピン)

ある日、オディンが私や友人たちに、ストリートチルドレンがたむろするマニラのトンド地区近くで食料援助活動をする計画をもちかけ、私たちは参加を快諾しました。ストリートチルドレンがうろつく姿は、大都市の至るところで目に入ります。その多くは交差点で停車中の車相手に物ごいをし、他人の携帯電話や貴重品をひったくるなどの軽犯罪に手を染めている子どももいます。比較的健康的で清潔な子どももいますが、栄養不良で不潔な子どもの多くは、咳止めシロップや接着剤で「ハイ」の状態を通りをさまよひ、死が訪れるのを待っています。

ストリートチルドレンを見て、まず私の頭に浮かんだのは「親はどこにいるのだろうか」、「学校に行ったことはあるのだろうか」、「かつては家と呼べる場所があったのだろうか」ということです。子どもたちは、私たちが持参したパンやミルク、果物をあげると喜んでくれました。おもちゃなどなくても、泥と埃の中を裸足で走りまわって鬼ごっこをする姿は、純粹に幸せそうに見えました。

食料援助活動中に、私たちは歩道で目覚めたばかりの3姉妹に出会いました。私が両親はどこにいるのかと尋ねると、1番年上の子が、自分たちは姉妹であること、両親は数か月前になくなったきり戻ってこないことを話してくれました。仕方なく、飢えと暴力を受けることを覚悟で、食料と衣類を人びとの施しにすがる道を選びました。彼女の話は私たち全員の胸を打ちました。この幼さで彼女は家長になってしまったのです。しかし、ちゃんとしたしつけも教育も受けずに、路上で成長していく彼女たちは一体どうなるのでしょうか?この思いが、別の場所へ移動する間も、私たちの心でくすぶり続けました。

食料を配り終えて、私たちはオディンの家に戻りましたが、私は複雑な気持ちになりました。ストリートチルドレンにとっては、経済や政府の動きも、シャツとズボンが合っているかどうかもどうでもいいことで、その関心はただ単に生き延びることだけにあります。21世紀の現代において、人類はあらゆる面で進歩を遂げていますが、飢餓と貧困の撲滅は、いまだに達成していません。路上生活をする子どもたちを含め、すべての貧困者を現実に救う解決策を見出すことを阻んでいるのは、人類の強欲さと腐敗だと私は考えています。



◀路上生活をする子どもたち

四川大地震のなかの子ども

大浜 慶子(中国)

去る2008年5月12日、中国四川省をマグニチュード8の大地震が襲い、多数の死傷者、行方不明者を出す大惨事となりました。被害状況が明らかになるにつれて、国中がその惨状に震撼し、ことのほか人びとの涙を誘ったのは、多くの子どもたちが犠牲になったことでした。幼稚園や小学校の校舎の相次ぐ倒壊で逃げ遅れた子どもたちが瓦礫の下敷きになり、たくさんの幼い命が奪われました。学校での犠牲者は相当数に達するとの見方があり、手抜き工事、建物の老朽化、耐震不足などの原因が指摘されました。当局は調査中とのことですが、いずれにせよ、社会的弱者である子どもたちに対する、普段は目に見えない不公平な扱いが、地震という自然災害によって顕在化し、このような不幸な状況を招いたという感はぬぐえません。

大地震で被災した人たちを救おうという運動が瞬く間に全土に広がり、すべての職場や民間団体が組織的もしくは自発的に募金活動を開始し、人びとは多額の寄付を惜しみませんでした。冥福を祈る追悼会が一斉に催され、オリンピックの祝賀や娯楽イベントは自粛、両親を失った孤児を養子にしたいという家族が大都市層を中心に続々と名乗りを挙げました。誰もが何かの役に立ちたいと立ち上がり、心を1つに合わせました。これを可能にしたのは、今回、中国政府が地震に対する報道を開放し、マスコミがそれに応えて大きな働きをしたことが一因と考えられています。

しかし、このように一見善意のムードに満ちあふれた報道の中にも、子どもたちに対する一種の暴力が潜んでいることを、ジェンダーや子どもの権利に敏感な識者は冷静かつ勇気をもって分析し、喚起しています。子どもはメディアの格好のターゲットになりやすく、またその報道は確かに社会的動員力を有します。しかし、子どもの立場に立てばどうでしょうか？ 専門家は、子どもだからといって本人の同意も得ず、マスコミ関係者が被災地区の子どもにマイクを向け、傷口を開くようなつらい体験を公衆の前で繰り返し話をさせるのは、子どもの二次的な傷害になると否定的です。「児童の最善の利益を考慮する原則」にのっとり子どもを最優先させ、そうでなければニュース価値があってもそれは放棄すべきだと呼びかけています。

中国の女性団体は上記の問題のほか、過去に世界で起こった自然災害とジェンダー問題の教訓を総括し、直ちに連名で国の地震対策本部に献策「被災地域の女性のニーズと権利に配慮を」を提出し、復旧作業のあらゆる段階で女性と女児の平等の権利およびその基本的ニーズが保障されるよう働きかけました。このようなアクションは、感情による連帯から一歩進んで、社会的責任と専門性に裏打ちされた公平なメカニズムづくりに寄与するもので、今の窮状において真に社会的弱者を助ける模範となり、他のNGO団体の先駆けとなったと評価されています。

フォーラムの窓

KFAWとESD

国連は、2005年から2014年を「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development: ESD)の10年」と定め、環境、経済、社会面のバランスがとれた持続可能な開発を目指して、従来の環境教育にジェンダー、異文化理解、福祉などさまざまな教育分野を取り入れた包括的な学習を推進しています。

北九州でも、2006年9月にKFAWを事務局とする北九州ESD協議会を設立し、「未来パレット」という愛称でESD活動を開始しました。同年12月には、国連大学によってESDの地域の拠点(Regional Centre of Expertise: RCE)に認定され、環境省から2006、2007年度「ESDの10年促進事業」を受託。加盟している57団体が、ESDプロジェクト、ニュースレター発刊などの広報活動、ESD出前講座やESD認知度調査などを、実施しています。

2008年7月に国連大学が主催した第3回RCE国際会議(バルセロナ)に出席しました。世界55地域のRCEから130名が参加し、テーマ別、大陸別に話し合いを持ちました。RCE北九州は、アジア太平洋地域RCE運営委員会設立のための準備委員会のメンバーとなり、連携強化に取り組んでいくことになっています。

ESDとは総合的な学習で、学んだことをよりよい社会実現のために生かし行動する人材育成を目的としています。これまで報告されている事例は環境分野が中心でジェンダー分野は数少ない状況です。しかし、私たちが創造し、次の世代に引き継ぎたい社会とは、男性も女性も、高齢者も子どもも、地球上すべての人が、衣食住が満たされ、教育を受け、平和で幸福に暮らせる社会です。そのためには、環境や経済面だけでなく、社会における公平性・公正性を確保することが重要です。人を性別というレンズで見るのではなく、個人個人としてそれぞれの個性を尊重する視点を持つことは、ESDに欠かせない要素です。

アジアを中心とする女性のエンパワーメントのための活動を行っているKFAWが、ESDにおいてジェンダーを主流化していくために果たせる役割は大きいと考えられます。今後も、世界の人びとと共に、「公正で持続可能な社会」構築に貢献する活動を続けていきたいと思っています。

(財)アジア女性交流・研究フォーラム(KFAW) 主任研究員

太田 まさこ

INFORMATION

Q & A 質問コーナー

～読者から寄せられた質問に、
通信員がお答えします～

日本では、1人でも、友だち同士で遊ぶ時でも、ゲームに熱中する子どもが多いです。あなたの国で、子どもたちがよくする遊びは何ですか？

質問者 細田 泰弘 (北九州市)

私たちがお答えします。



プハワナ・ウパデヒアユ
(ネパール)

ネパールには、子どもたちのための娯楽施設がありません。例えあったとしても、中流家庭以下の子どもたちにとっては手の届きにくいものです。また、私立や全寮制の学校ではパソコンの授業がありますが、都市部であっても家庭でパソコンを使える子ども

は少ないです。ゲームについても同様で、多くの子どもたちにとっては高根の花となっています。

農村部の子どもたちがよくするのは、ダンディ・パイオやカバディ、バドミントンなどです。

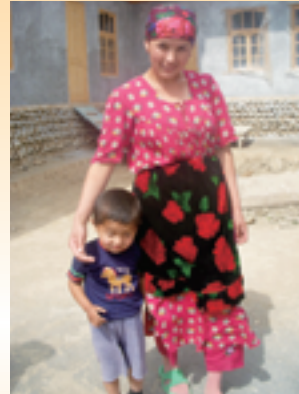
ダンディ・パイオというのは、ネパールでとても人気がある遊びです。ダンディという約60cmの棒とパイオという約15cmの木のピンを使い、2人以上で遊びます。まず、地面に直径がピンの長さよりも小さい穴を掘り、ピンをその穴にわたします。そして棒の一方をその穴に入れ、もう一方を持ちます。棒を動かして、ピンにあてて飛ばし、ピンを相手がキャッチしたら交代です。もしピンが地面に落ちれば得点となり、より多く、そして遠くにピンを飛ばした人の勝利です。

一方、都市部の子どもたちは、テレビを見て過ごすことが多いです。中には1日3時間から5時間も見ている子どももいます。しかし、農村部の子どもたち同様、スポーツをしたり、おしゃべりをしたりして楽しむことも多いです。

アジアの風景

～読者から寄せられたアジアの人びとの生活を紹介します～

ラコン村の親子 (タジキスタン)



タジキスタン北西部に位置する、ソグド州イスファラ市近郊の村ラコン。私が訪れた5月には、この一帯の家で蚕を育てていました。この村では水や電気の供給が安定せず、この日もその両方ともが止まっていた。そのような状況の中でも、笑顔を絶やさず、蚕の世話や子育てをする若い母親の姿が強く印象に残りました。

(写真提供 ウズベキスタン 河野 明日香)



ヴォクマ・ジョセリン
(ブルキナファソ)

最近では、ブルキナファソでも、裕福な家庭の子どもたちはゲームで遊びます。しかし、多くの家庭では、一般的に6人から10人もいる子どもたちのためにゲームを買うのは難しい状況です。そのため、多くの子どもたちは、道端で自由に遊んだり、車ごっこや馬ごっこ、人形ごっこなど、日常生活において自分たちが気になるもので遊びを作ったりします。最近では、テレビの映像に影響を受けた遊びが多いようです。

また、子どもたちが夜集まって、自分の知っている物語を、お互いに語って聞かせることもあります。特に以前は、子ども向けの本がなかったため、このような遊びは子どもたちを文化的に教育する1つの手段でした。

表紙写真「民家の庭先で遊ぶ子どもたち」(中国) 撮影者 大浜慶子

中国雲南省西双版納にて。この日は中国の少数民族基諾族のお正月です。お祭りの会場に向かう途中、立ち寄った民家で遊ぶ子どもたち。あまりのほほえましさにシャッターを切りました。どこにいっても子どもたちの笑顔は世界共通です。



KITAKYUSHU FORUM ON ASIAN WOMEN
財団法人 アジア女性交流・研究フォーラム

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4 北九州市大手町ビル 3F
TEL (093)583-3434 FAX (093)583-5195
E-mail : kfaw@kfaw.or.jp URL:http://www.kfaw.or.jp

